

J A 御中
(営農担当部署)

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：J A 福岡中央会 担い手・営農サポートセンター)

(公 印 省 略)

営農情報 1

水稻生産は、以下の点に留意しましょう。

1. 健全な苗づくりをする
2. 適期に移植する
3. 前年夏作が大豆のほ場は基肥を減らす

《1. 水稻は適期に移植しましょう！》

収量、品質向上のため、品種に応じた以下の適期に移植しましょう。

品種	移 植 適 期 (平坦地の場合)
夢つくし	6月10日～20日
元気つくし	6月10日以降 (6月下旬が望ましい)
実りつくし	6月20日頃
ヒノヒカリ	6月21日以降

適期より早く移植すると・・・

① 検査等級や収量が低下します。

(登熟期間が高温に当たり、白未熟粒や充実不足粒が発生するため)

※ 高温耐性品種の「元気つくし」でも早植えにより検査等級や収量が低下します。

② ウンカ類や縞葉枯病が多発しやすく、被害が大きくなります。

《2. 品質の良い米づくりは健全な苗づくりから！》

近年、育苗期にいもち病やもみ枯細菌病の発生が増加しています。菌を本田に持ち込まないように、育苗期から対策を徹底しましょう。

【いもち病対策】

- ・ 塩水選及び種子消毒の徹底。
- ・ 育苗箱への薬剤かん注処理や箱施薬など、予防対策の徹底。
- ・ 置き苗の早めの除去 (いもち病の発生源になるため)。
- ・ 本田では多肥栽培を避け、ケイ酸質資材も施用する。

【もみ枯細菌病対策】

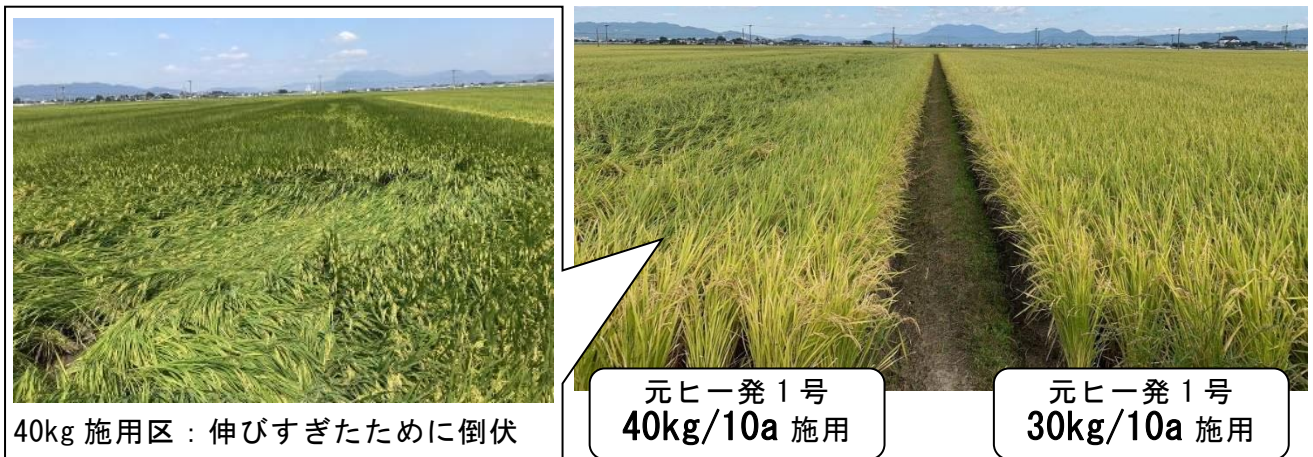
- ・ 塩水選や種子消毒の徹底。
- ・ 出芽期～緑化期の高温多湿 (32℃以上) を避ける。

《3. 前年夏作が大豆だったほ場は基肥を減らしましょう!》

前年夏に大豆を作付けしたほ場では、水稻の生育が旺盛となり、倒伏等による収量低下が見受けられます。

【現地の実例（平成30年産「実りつくし」）】

- 前年夏作が大豆だったほ場に「実りつくし」を作付。
- 前年夏作が水稻の場合の地域の基準に従って「元ヒ一発1号」を40kg/10a施肥した場合、稈長が伸びすぎて倒伏。
- 一方、「元ヒ一発1号」を30kg/10aに減らしたほ場では倒伏せず、登熟歩合が向上。その結果、収量が80kg/10a増収。



写真：前年夏作に大豆を作付けしたほ場での「実りつくし」の生育の様子

表：前年夏作に大豆を作付けしたほ場での施肥量の違いによる生育と収量の違い

施肥量 (元ヒ一発1号)	稈長 (cm)	倒伏程度	登熟歩合 (%)	収量 (kg/10a)
30kg/10a	84	0	75.9	583
40kg/10a	94	2.5	46.9	503

※久留米普及指導センター調査。

※倒伏程度は数字が大きいほど倒伏していることを表す。

上の写真や表のように、前年夏作が大豆だったほ場では、基肥を減らすことで、倒伏が抑えられ、登熟歩合の向上により収量が安定します。

1. 健全な苗づくり
2. 適期移植
3. 前年夏作が大豆のほ場は基肥の減肥

で今年も美味しい米づくりをしましょう!



以上